



毎週火・金曜発行



毎月第3土曜発行



毎月第2・4土曜発行



毎月第2・4木曜発行

おでかけ
おうち時間

GX PRESS

年末年始合併号



福祉・貧困

健やかな成長 大学生がサポート 子ども食堂「すみれ学級」(大分市)

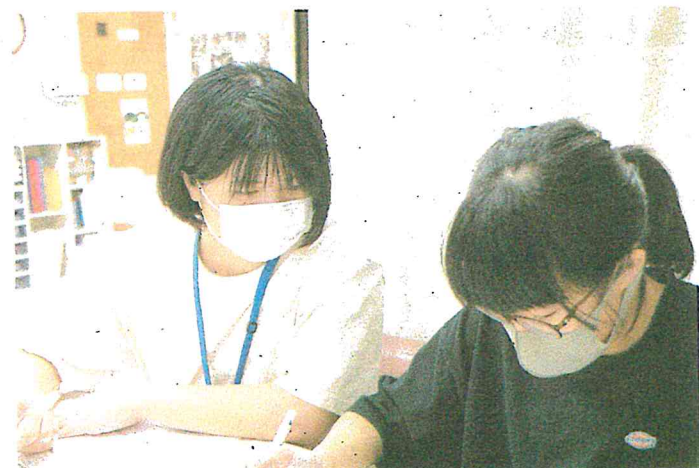
県内7カ所で子ども食堂を開く「すみれ学級」の理事長藤井富生さん



「いただきます」。日が落ちて暗くなった12月の夕刻。大分市敷戸西町の子どもの食堂「すみれ学級」敷戸教室では小学生と大学生が夕食のテーブルについた。感染対策のため、黙って食べなければならないが、温かい食事を取ると、食卓に並ぶ子どもたちの顔はほころんだ。



すみれ学級の敷戸教室で、小学生と一緒に食卓につく大学生＝大分市敷戸西町



学校の宿題や受験に向けた勉強など大学生による中学生への学習支援も

2 012年に東京都で始まり全国各地に広がる子ども食堂。家庭の経済状況のため、十分な栄養が取れなかったり、親の帰宅が遅く一人で過ごしていたりする子どもたちに食事と居場所を提供している。県内には84カ所(11月末現在、県社会福祉協議会調べ)に設けられている。

そのうちの一つ、すみれ学級は調剤薬局の運営会社「そりん」(大分市)が16年に地域貢献で始めた。18年には公益財団法人化し、大分、別府、豊後大野各市の計7カ所で活動している。小中学生は誰でも無料で利用できる。

満たされるまで食べられなかったり、季節感のない服装をしていたり、毎月のように保健室に生理用品をもらいに行ったり。同法人によると、大分でも子どもの健全な成長が妨げられている現状があるという。

敷戸教室では、大分大学の学生が運営に関わる。学生にとっても居場所であり、学びの場となっている。

経済学部ではゼミの希望者が実習で通う。実習が終わってもアルバイトとして通い続ける学生も多い。同学部4年の若林咲希さん(22)＝顔写真

＝は「子どもたちとは友だちのような関係。一緒に遊ぶのは楽しいし、話していると『こんなこと考えるんだ』という気付きもある」と話す。



子どもたちの学習がはかどるよう工夫をしたり、スタッフの勤務シフトを組んだり、学生が担う役割は大きい。同学部の石井まこと教授(55)は「通う学生は社会の問題に目を向けて主体的に考え、動くようになっている。学生が成長する場だ」と実感する。

笑いながら遊び、懸命に勉強する子どもたちの中には、必要なものが手に入らなかったり孤独を感じていたりする子がいる。大人が目を向けようとしなければ「問題」は、なかなか浮かび上がらない。

運営する法人理事長の藤井富生さん(74)は「一番困っている人は子ども食堂に来ることもできないのかもしれない。だが、自分の手が届く限りでも支援をしていくことで社会の中にある問題に光が当たる。いつか一番困っている人のところにも手が届くかもしれない」と願いを込めて活動を続けている。